

### 3. 小泊校下4集落の農業

江 崎 真 澄

1. はじめに
2. 農業の概要
3. 農業の現在とこれから
4. おわりに

#### 1. はじめに

今回の調査で住民の方にお話を伺っていると、「この辺りは昔から半農半漁で・・・」という言い回しをよく耳にした。この「半農半漁」という言葉は特に、昔漁師町だったという高波と、港（小泊港）や定置網（小泊定置）のある小泊の2集落で頻繁に聞くことが出来た。

私はこの言葉の中に土地への愛着と誇りを感じ、「半農半漁」という生活に興味が湧いた。実家が農家であることもあり、もともと農業に興味があったので、その「半農半漁」の一端である農業について記述することにした。

#### 2. 農業の概要

ここでは農業センサス等の統計資料や住民の方への聞き取りをもとに、1960年から現在にかけての農業の変遷を述べる。

統計資料から

まずは統計資料からわかることを整理したいと思う。

表 1-1 専兼業別農家数（雲津）

	総戸数	総農家数			
			専業農家	一種兼業	二種兼業
1960年	79	65	5	31	34
1970年	79	57	1	9	47
1975年		55	—	6	49
1980年	84	48	—	5	43
1985年		44	2	4	38
1990年	86	35	1	3	31
販売農家		26	1	3	22
1995年		34	1	7	26
販売農家		23	—	6	17
2000年	88	23			
販売農家		17	2	2	13
2005年(販売)		13	1	—	12

農林水産省 農林業センサス

表1-1～1-4<sup>1</sup>を見ると、1960年から2005年までの45年間、小泊校下の全ての集落で農家総数は大幅に減少しており、雲津・小泊・伏見では総戸数が微増する一方、農家総数は半数以下に減少していることが分かる。また、専業・兼業の内訳は小泊校下全てで1960年の時点でほとんどが兼業農家で、1970年からは第2種兼業農家が第1種兼業農家より多くなっている。第2種兼業農家率（2007年）は石川県全体で74.7%、全国平均は61.7%であった<sup>2</sup>。それに対し、小泊校下では2005年の第2種兼業農家率が66%～92%であり、県平均・全国平均と比べかなり高いといえる。

表 1-2 専兼業別農家数（小泊）

	総戸数	総農家数	専兼業別		
			専業農家	一種兼業	二種兼業
1960年	71	65	3	51	11
1970年	73	62	1	21	40
1975年		62	—	10	52
1980年	77	68	1	2	65
1985年		62	1	4	57
1990年	79	57	1	1	55
販売農家		34	—	1	33
1995年		46	2	—	44
販売農家		37	2	—	35
2000年	80	36			
販売農家		25	—	—	25
2005年(販売)		13	—	1	12

農林水産省 農林業センサス

表 1-3 専兼業別農家数（伏見）

	総戸数	総農家数	専兼業別		
			専業農家	一種兼業	二種兼業
1960年	37	36	3	26	7
1970年	41	39	—	18	21
1975年		40	—	14	26
1980年	41	37	—	16	21
1985年		38	5	10	23
1990年	40	25	1	7	17
販売農家		22	1	7	14
1995年		24	1	11	12
販売農家		18	1	11	6
2000年	41	20			
販売農家		16	1	5	10
2005年(販売)		12	2	1	9

農林水産省 農業センサス

表 1-4 専兼業別農家数（高波）

	総戸数	総農家数	専兼業別		
			専業農家	一種兼業	二種兼業
1960年	28	26		18	8
1970年	25	24	1	9	14
1975年		22	2	9	11
1980年	25	22	3	8	11
1985年		22	3	6	13
1990年		16	1	3	12
販売農家		14	1	3	10
1995年		13	2	3	8
販売農家		12	2	3	7
2000年	25	12			
販売農家		12	3	2	7
2005年(販売)		12	2	2	8

農林水産省 農林業センサス

小泊では、1960  
年の総戸数が 71  
戸に対し総農家  
数は 65 戸と、集  
落を構成する家  
はほとんどが農  
家であった。こ  
れが 2005 年には  
総戸数 80 戸に対

表 2 農業就業人口に占める 65 歳以上高齢者の割合 (%)

年次	雲津	小泊	伏見	高波
1970	22.1(15/68)	23.4(25/107)	15.3(11/72)	10.6(11/104)
1975	33.3(18/54)	27.4(17/62)	20.6(13/63)	14.1(13/92)
1980	37.2(16/43)	34.3(23/67)	22.7(15/66)	14.3(13/91)
1985	46.3(19/41)	35.7(20/56)	31.9(22/69)	15.5(13/84)
1990 (販売)	50.0(12/24)	45.5(10/22)	30.6(15/49)	18.5(12/65)
1995 (販売)	60.0(18/30)	75.9(22/29)	50.0(19/38)	28.1(16/57)
2000 (販売)	70.8(17/24)	61.9(13/21)	51.4(19/37)	37.7(20/53)
2005 (販売)	80.0(16/20)	64.3(9/14)	69.6(16/23)	37.5(18/48)

括弧 ( ) 内は (65 歳以上人口/農業就業人口総計)  
農林水産省 農林業センサスより

し総農家数 13 戸となっており、その割合は 5 分の 1 以下まで低下した。他の集落も同様に 1960 年と 2005 年を比較すると、雲津は 79 戸中 65 戸から 88 戸中 13 戸に、伏見は総戸数 37 戸中総農家数 36 戸から 41 戸中 12 戸に、高波は 28 戸中 26 戸から 25 戸中 12 戸へと変化し、それぞれ大幅に農家数を減少させている。

1970 年以降小泊校下全てで第 2 種兼業農家数は第 1 種兼業農家数を上回っているが、雲津だけは 1960 年の時点からすでに第 1 種兼業より第 2 種兼業農家の方が多かった。後に詳述するが、雲津は他の集落に比べ耕地面積が狭く、勤め人の割合が高い。瓦産業・珪藻土工業・機織物など、農業以外の産業が盛んであったことが早くから第 2 種兼業農家の割合が高くなる要因であったと考えられる。また 1970 年以降、1 種兼業が 2 種兼業より多くなることはないが、伏見だけは 1995 年に一度だけ 1 種兼業が 2 種兼業より多くなっている。

農業就業人口についても大きな変化があり、1970 年には 10～20%前後と低かった農業就業人口に占める 65 歳以上の高齢者の割合が年々増加し、2000 年には小泊校下全てで 30%を超え、農業の担い手の高齢化が進んでいる。特に雲津は

2000 年で 70%、2005 年では 80%と特に高齢者の割合が高い (表 2)。

経営耕地については、表 3-1～3-4 及び表 4-1～4-4 を見て欲しい。1960 年から 2005 年までで耕地面積 (経営耕地面積計) を比較すると、1970

表 3-1 経営耕地面積 (雲津)

単位 a	面積計	田	畑	樹園地		
					果樹園	桑園
1960年						
1970年	2870	2110	1680	80	—	80
1975年	2780	1910	854	16	—	16
1980年	2374	1661	693	20	—	20
1985年	2237	1447	770	20	—	20
1990年	2249	1368	776	105	—	105
販売農家	2084	1251	728	105	—	105
1995年	1751	1139	612	—	—	—
販売農家	1559	1024	535	—	—	—
2000年	1588	1094	484	10	10	—
販売農家	1467	1011	446	10		
2005年販売	1308	721	587	—		

農林水産省 農林業センサス

年の経営耕地面積の小泊校  
下合計は12,830a だが、2005  
年には合計で 8,315a となっ  
ており、全体としては大幅に  
減少している。表 4-1～4-4  
の4つの表を見比べると、ど  
の集落も1985年以前と1990  
年以降で表を2つに分けら  
れる。1985年以前は経営耕  
地面積 0.3ha 未満～2.0ha の  
あいだに数値が集中してい  
るが、1990年以降は全体に  
右にシフトし5.0ha以上の経  
営耕地を持つ農家が現れる  
など、経営規模が拡大してい  
る。しかし依然として経営耕  
地面積 10.0ha 以上の農家は  
いない。また、5.0ha 以上の  
経営耕地を持つ農家が現れ  
る一方で、1990年以降は自  
給的農家<sup>3</sup>も増加しており経  
営規模の二極化が起きている。  
この点については、聞き  
取りによって1984年から  
1988年にかけて耕地整理が  
行われ、水田・畑共に面積の  
増大が図られたこと、耕地整  
理をきっかけに農地を手放  
す人がいたことなどが明ら  
かとなっている。

経営耕地面積について集  
落毎に比べると、雲津・小泊

表 3-2 経営耕地面積（小泊）

単位 a	面積計	田	畑	樹園地	果樹園
1960年	4752	2687	2075	—	—
1970年	4190	2620	1580	—	—
1975年	3765	2387	1281	97	97
1980年	3828	2601	1114	113	113
1985年	3280	2478	664	138	138
1990年	2690	2013	621	56	56
販売農家	2274	1722	506	46	46
1995年	2576	1903	582	91	91
販売農家	2400	1810	514	76	76
2000年	2174	1719	385	70	70
販売農家	1947	1561	326	60	60
2005年販売	1370	1162	180	28	28

農林水産省 農林業センサス

表 3-3 経営耕地面積（伏見）

単位 a	面積計	田	畑	樹園地	果樹園
1960年					
1970年	3190	1650	1540	—	—
1975年	3265	1608	1622	35	35
1980年	3143	1413	1585	145	145
1985年	3657	1468	2169	20	20
1990年	3697	1286	2359	52	52
販売農家	3637	1243	2343	51	51
1995年	4090	1608	2477	5	5
販売農家	3964	1560	2404	—	—
2000年	3989	1569	2420	—	—
販売農家	3908	1495	2413	—	—
2005年販売	3057	1451	1508	100	100

農林水産省 農林業センサス

表 3-1 経営耕地面積（高波）

単位 a	面積計	田	畑	樹園地	果樹園
1960年					
1970年	2580	1730	760	80	80
1975年	2476	1714	750	12	12
1980年	2323	1482	831	10	10
1985年	2591	1509	1082	—	—
1990年	3296	1622	1674	—	—
販売農家	3261	1613	1648	—	—
1995年	3230	1410	1820	—	—
販売農家	3205	1400	1805	—	—
2000年	2650	1405	1240	5	5
販売農家	2650	1405	1240	5	5
2005年販売	2580	1407	1173	—	—

農林水産省 農林業センサス

では大きく減少しているが、伏見・高波はあまり変化していない。農家一戸当たりの経営耕地面積は雲津では1970年50.4aに対し2005年100.6a、小泊は1960年73.1aに対し、2005年105.4aとそれぞれ増加している。耕地面積が減っているのは農家数減少のためで、一戸当たりの経営規模はむしろ拡大していることが分かる。また全体の耕地面積にあまり変化がない伏見と高波でも、一戸当たりの経営耕地面積は増加しており、一戸当たりの経営規模は拡大しているといえる。

表 4-1 経営耕地面積規模別農家数（雲津）

	自給的 農家	例外規定 販売農家	0.3ha 未満	0.3～ 0.5	0.5～ 1.0	1.0～ 2.0	2.0～ 3.0	3.0～ 5.0	5.0～ 10.0	10.0ha 以上
1970年		—	9	14	20	14	—	—		
1975年		—	12	19	20	4	—	—		
1980年		1	10	19	15	3	—	—		
1985年		—	13	13	12	6	—	—		
1990年	9									
販売農家		—	*	10	9	6	1	—	—	
1995年	11									
販売農家		—	*	12	8	2	1	—	—	
2000年	6									
販売農家		—	*	8	7	1	—	—	1	
2005年販売			—	2	8	2	—	1	—	—

農林水産省 農林業センサス

表 4-2 経営耕地面積規模別農家数（小泊）

	自給的 農家	例外規定 販売農家	0.3ha未 満	0.3～ 0.5	0.5～ 1.0	1.0～ 2.0	2.0～ 3.0	3.0～ 5.0	5.0～ 10.0	10.0ha 以上
1970年		—	7	12	31	12	—	—	—	—
1975年		—	7	21	25	9	—	—	—	—
1980年		—	11	19	31	7	—	—	—	—
1985年		—	15	20	21	5	1	—	—	—
1990年										
販売農家	23	—	*	14	16	2	2	—	—	—
1995年										
販売農家	9	—	*	16	18	2	1	—	—	—
2000年										
販売農家	11	—	*	11	9	4	—	—	1	—
2005年販売			—	2	8	2	—	—	1	—

農林水産省 農林業センサス

表 4-3 経営耕地面積規模別農家数（伏見）

	自給的 農家	例外規定 販売農家	0.3ha未 満	0.3～ 0.5	0.5～ 1.0	1.0～ 2.0	2.0～ 3.0	3.0～ 5.0	5.0～ 10.0	10.0ha 以上
1970年		—	7	3	15	13	1	—		
1975年		—	5	6	12	17	—	—		
1980年		—	6	7	10	13	1	—		
1985年		—	10	8	9	5	3	3	—	
1990年	3									
販売農家		1	*	1	9	4	2	4	1	
1995年	6									
販売農家		—	*	4	2	6	1	3	2	
2000年	4									
販売農家		—	*	—	8	1	2	2	3	
2005年販売			—	2	3	4	—	—	3	—

農林水産省 農林業センサス

表 4-4 経営耕地面積規模別農家数（高波）

	自給的 農家	例外規定 販売農家	0.3ha未 満	0.3～ 0.5	0.5～ 1.0	1.0～ 2.0	2.0～ 3.0	3.0～ 5.0	5.0～ 10.0	10.0ha 以上
1970年		—	3	3	5	11	2	—		
1975年		—	4	1	5	9	3	—		
1980年		—	3	2	5	9	3	—		
1985年		—	6	2	4	5	3	2	—	
1990年	2									
販売農家		—	*	—	5	3	1	3	2	
1995年	1									
販売農家		—	*	—	4	2	2	1	3	
2000年	—									
販売農家		—	*	—	6	1	3	—	2	
2005年販売			—	—	5	2	2	1	2	—

農林水産省 農林業センサス

石川県は水田率が83.6%（2007年）と全国シェアの54.4%（2007年）に比べ高いが、小泊校下では2005年の水田率が雲津55.1%、小泊 84.8%、高波 54.5%、伏見 47.5%となっている（表5）。

小泊は石川県と同様に水田率がかかなり高いが、雲津・高波はほぼ全国平均と同程度である。伏見は小泊校下中で一番水田率が低

表5 水田率（%）

年次	雲津	小泊	伏見	高波
1970	22.1	23.4	15.3	10.6
1975	33.3	27.4	20.6	14.1
1980	37.2	34.3	22.7	14.3
1985	46.3	35.7	31.9	15.5
1990（販売）	50.0	45.5	30.6	18.5
1995（販売）	60.0	75.9	50.0	28.1
2000（販売）	70.8	61.9	51.4	37.7
2005（販売）	80.0	64.3	69.6	37.5

農林水産省 農林業センサスより

く、1975 年から 50%を下回っている。また表 3-1～3-4 の畑の面積を見ると、伏見は他の集落と比較しても畑の面積が大きく、このことから畑が重要であることが分かる。

### 耕地整理

耕地面積に関連して耕地整理について触れておく。1949（昭和 24）年に土地改良法が施行され、政府の奨励などもあり珠洲の各地に土地改良区が設立され、石川県や珠洲市主導で土地改良事業が行われ始めた。珠洲の土地改良事業の主目的は、開田・開畑、耕地区画整理、灌漑排水施設の整備、農道の整備、農地交換分合などであった。以後各年にわたり、県や市の単独補助事業として溜め池の新造・改修、区画整理などが各地で行われた。1974（昭和 49）年から国営農地開発事業が行われ、水稻部門では圃場整備と乾田化を推進し、大型機械の導入を可能にした。畑作部門では畑地率の高い三崎町を中心に基盤整備をし、スイカ、露地メロン、白菜、キャベツの産地化を図った。

住民の方のお話を整理すると、小泊校下では戦後 2 回耕地整理があり、1 度目は 1950（昭和 30）年代、2 度目は 1984～1988（昭和 59～63）年に行われた。耕地整理によって田の面積が広がったり、U 字溝が整備されたりして田植えや稲刈りなどの農作業が機械化した。1 度目の耕地整理は米の増産のため、田の面積拡大を主な目的としていた。二度目の耕地整理は 1984～1988 年のあいだに畑、1988 年から田の順に行われた。田は 5 年の間、紀の川一帯の区画整理を行った。畑は市の土地改良と県の土地改良で小泊校下を第 1 校区、第 2 校区の 2 班にわけて行われ、第 1 校区は雲津・小泊、第 2 校区は伏見で高波はどちらにも入っていなかった。珠洲全体で、畑の大型農業ができるようにしようという流れがあって行われたが、小泊校下は遅い方だった。この時は葉タバコ用に整理したわけではなかったが、整理した畑で葉たばこを作る人が多かった。

高齢化や人手不足のため、耕地整理をきっかけに耕地を手放す人が多かったようである。また、現在棚田はほとんどが耕作放棄地になっているそうだ。

一口に「半農半漁」というが、集落ごとに細かな違いがある。昔から漁師が多いのは小泊と高波で、農業と漁業で生計を立てていたそうだ。反対に、伏見は農業が中心で、漁業はごく一部の人がしかやっていないという。伏見は畑作も稲作もこなし、他の集落に比べて耕地が多い。雲津は周りの集落に比べて、勤め人の割合が高く、農業も漁業も他の 3 集落ほど盛んではないと言われている。前掲の表 3-1～3-4 について、伏見が他の 3 集落に比べ耕地が多くまた水田より畑が多いという特徴があることは既に述べたが、これは葉タバコ栽培が盛んであったことと関係があると思われる。

作っている農作物について地域のことに詳しい A さん（60 歳代、男性）と B さん（70 歳代、

男性) に話を聞いた。小泊校下で現在主に作っている農作物は、米、葉タバコ、スイカ、カボチャである。葉タバコ栽培は1955(昭和30)年ごろから行われるようになり(専売公社[現在のJT]が推進)、当時は小泊に10軒強、雲津に10軒の葉タバコ農家があったそうだ。1965(昭和40)年ごろからは耕運機が使用されるようになったが、1975(昭和50)年ごろまでに衰退し、現在も葉タバコ栽培を続けている農家は4軒のみである(雲津1軒、伏見1軒、高波2軒)。たばこブームが去ると、カボチャとスイカが作られるようになった。スイカは天候によって左右されるため、保険作物としてカボチャも一緒に作る。カボチャ栽培は珠洲では三崎を中心にはじまり、最初周りの目は冷ややかだったが、ここ2、3年で能登カボチャ(穴水、門前のものを含めて)として大阪で人気が出てきたという。また、カボチャは単体で作ることもある。

表3-4を見ると、雲津は樹園地の欄に果樹園に加え桑園という項目がある。聞き取りによると葉タバコの栽培が盛んになる以前に養蚕をしていたそうだ。養蚕は雲津だけでなく、高波でも行われていた。養蚕が行われていたのは葉タバコ栽培が流行するまでだったそうだ。養蚕が衰退した理由について、実際に養蚕をされていた方たちは次のように述べている。

「葉タバコ栽培が流行するようになり、匂いで蚕が酔ってしまっただめになった」(70歳代、女性)

「葉タバコ栽培を始めてから、蚕がタバコの影響でおかしくなり、タバコと蚕は両立できないことがわかって徐々にタバコに移行していった」(70歳代 男性、70歳代 女性、50歳代 女性)

### 溜め池

この地域の特徴の一つに溜め池の多さがあげられる。『珠洲郡誌』(1985:682)によれば三崎は地形的な理由から山間溪谷に小規模の田地が散在するため、小規模の灌漑用貯水池が多数存在し、小泊校下にも多数の溜め池があったという。

現在も溜め池は稲作に利用されている。土地の所有関係は溜め池の水系ごとにまとまっており、田圃を持っている人が自分で管理するか共同で管理している。小規模のものが多く、水の配分には苦勞し水争いが起きることもあるそうだ。雁の池(がんのいけ、がんなしのいけ)という大きな溜め池があり、それは三崎で共同管理している。

小泊校下の水田の多くは、集落から少し離れた内方という別の集落の近くにある。近くに紀の川という川があり、その川の周辺に水田が広がっている。これは川の近くのほうが水田を作りやすい数という理由のためである。溜め池では雨水を溜めて使うので、雨が少ない年は1シーズン水が持つかどうか不安があり水田が作りにくいのだそうだ。



### 3. 農業の現在とこれから

現在日本の農業は様々な危機に瀕している。担い手の高齢化や後継者不足はもちろんのこと、耕作放棄地の増加で農村の荒廃が深刻である。また、米の販売価格の低迷、関税引き下げや農作物の輸入自由化によって安い外国産の作物との競争にさらされるなど生産者にとって厳しい状況が続いている。さらに、食糧自給率の低下や、昨今の食品偽造問題などから消費者の食に対する関心は高まっており、よりおいしく、より安心・安全なものを口にしたいという消費者のニーズに応えていくことも必要だ。

この節では具体的な個人を採り上げ、変化する農業をとりまく環境にどのように対応しているのかを追ってみたいと思う。

#### ◆ Cさん（30歳代、男性、小泊）

Cさんは30歳代という若さで、一人で大規模に農業を営んでいる。兼業農家で、近隣の集落にある会社に勤めている。農繁期の4月末～5月末、9月末～10月末は会社を休んで農作業に専念する。米を主に販売用に、畑は自家用と知人にあげる分を作っている。漁業は行っていない。

現在作っている水田の面積は約650a（借入れ耕地を含む）で、父の代から人の田を借りていた。Cさんの住む集落の水田の大部分をCさんが請け負っている。14年前（＝1995年）に県の事業で耕地整理を行い、大型機械を入れた。

機会の耐用年数はだいたい5年で、Cさんはローン会社から借金をして機械を維持している。田植え・草刈・乾燥・粃摺り・選別・計量の作業でそれぞれ別の機械が必要なので、最低6台（6種類各1台ずつ）の機械とそれに加えて3種類の草刈り機が必要となり、機械の維持が大変である。

作業は刈取り・乾燥・粃摺りを繰り返し、刈取りにはコシヒカリでだいたい2週間かかる。Cさんは刈取り時期をずらすために、早稲はのとひかり・ゆめみずほ、中稲はひとめぼれ・コシヒカリ、晩稲はモチ米といったように数種類の品種を作っており、刈取り時期は少しずつずれている。米は刈取りが遅れると品質が落ちてしまうため、刈取りの時期は重要である。米には等級があり、1等と2等では値段に雲泥の差があるが品質が落ちてしまうという値段がつかない。

#### 色々な取り組みや工夫

Cさんは現在減農薬・半有機栽培に挑戦している。子どもが生まれてから「化学肥料をいっぱい使っても美味くない。子どもに美味しいものを食べさせたい」という気持ちから始めたそう。毎年違うやり方を試しており、現在は寒冷地に強いといわれている鶏糞を試験的に用いている。

しかし消費者は「他の消費者の評価や見た目に惑わされている。」とCさんは言う。完全無農薬を試したことがあったが、駄目だったようだ。

作った米の6割は農協へ出しているが、残りは自主販売で珠洲市内の人から電話注文を受け付けている。京都や大阪からも注文がある。現在はロコミやチラシ（買ってくれた人に渡す）で宣伝しているだけだが、チラシには作業風景の写真をいれるなど工夫をしている。またインターネットを使って何かやりたいと思っており、消費者へのアピールはまだ工夫の余地がある。

### 農業を継ぐきっかけ

最後に、農業の後継者不足についてCさんに意見を伺った。Cさんは「幾ら収入が入って、幾ら経費として出て行くのか、内容を見せないから農業をやりたいという人がいない」とおっしゃっていた。

Cさんは実家がもともと農家だったので、子どもの頃から家の仕事を手伝っていた。高校卒業後県外に出ていたが、父親が倒れたのをきっかけに戻ってきた。そのときには既に大型化されていたため農業を続けた。その後父親が入院してしまい、「やるしかない」と思ったそうだ。農業の知識は独学で身につけたそうだが、子どもの頃から農作業を手伝っていたことが知識習得の下地になったのだろう。また県外で働いていたとき近江米というブランド米を運送していたことも、農業を継ぐきっかけとして大きかったそうだ。

### ◆ Dさん（50歳代、男性、伏見）

Dさんは葉タバコ、カボチャ、米を栽培している。3代続けて婿養子という珍しい家系である。葉タバコの栽培は先代が始めたそうで、Dさんの実家も農家だったがタバコは養子に入ってから始めて経験した。作付面積は葉タバコ295a、水稻170a、カボチャ30a、自家消費（スイカ、トウモロコシなど）1aである。葉タバコは野菜や果実ほど価格が上下せず、他の農作物に比べわりと安定しやすい。また、手をかけただけ良いものが出るそうだ。カボチャはまだ始めて1年目で、葉タバコを

表6 葉タバコ栽培農家の一年の仕事の流れ

時期	仕事の内容
2月半ば	葉タバコの種まき
4月半ば	畑へ葉タバコの苗を植える 田を耕す しろかき
5月連休後	田植え 葉タバコのわき芽除去作業(5月いっぱい) 3, 4回行う。 作業所掃除
6月中旬	葉タバコ収穫(8月いっぱい)
9月中旬	稲刈り、乾燥、もみすり(9月いっぱい) 葉タバコ選別、畑を耕す
10月下旬	葉タバコ収納所へ
11月半ば	土壌消毒
農閑期	大豆、小豆の選別

※合間に畑（カボチャ、自家消費用の野菜の世話）も入る  
出所： 聞き取りから作成

栽培しながら同じ24時間を過ごすなら「少しでも収入の足しになることをしよう」と思い、作り始めた。

1年の仕事の流れと葉タバコの作業は表1の通りである。作業は家族で協力して行っており、主にDさん・Dさんの妻（55歳）・Dさんの娘（30歳）・娘の夫（31歳）の4人で作業をする。稲刈りの際、コンバインで作業を行いやすいように田の四隅を刈ることや、葉タバコの選別を行うことは主に女性の役割で、機械を使った稲刈り、田植え、籾摺り、乾燥などは男性の仕事である。


### 農業の魅力

Dさんの娘のFさんは高校卒業後しばらく市外へ出ていたが、結婚後すぐに実家に戻り夫と共に農作業を手伝っている。初めは慣れない作業で大変だったが、今年で3年目に入り大分慣れてきた。「農業は時間に縛られない仕事で、しかも家族と働いているので精神的苦痛は少ない」と農業に魅力を感じている。

#### ◆ Eさん（50歳代、男性、高波）

Eさんは専業農家である。Eさんの家はずもともと農業をしており、跡を継ぐと思い農業高校に通った。現在、稲作と葉タバコ栽培を主に行っており、米では仲間2人と農業法人を作って経営している。

表7 葉タバコ栽培の作業

種まき	肥土に沢山まく。
仮植	種が出てきたらよいものを選び一つずつ別の肥土に植える。
畑へ植える	295アールに6200本すべて1本1本植える。人夫を雇い、45人で1週間ほどかけて植える。
わき芽かき	 <p>わき芽（茎と葉の間から出る新しい芽）を摘む。3〜4回芽が出るため、3〜4回行う。しかし、すべての芽が同時に出るわけではないので、その回数以上は畑を回らなければならない。</p>
収穫	下の葉から熟していくため、収穫は一つの畑で5〜6回行われる。（下葉、中葉、アイ葉、本葉、天ぼり）
選別	ランクごとに葉を分ける

出所：聞き取りから作成

### JTとの契約について

葉タバコ栽培をするためにはJT（日本たばこ産業株式会社）の契約農家にならなければならず、自由に作ることはできない。専売公社からJTが変わって締め付けが厳しくなった。例えば、農薬は登録された農薬以外使用してはならず、日付・回数・濃度などを細かく報告しなければならない。収入も少なくなった。葉タバコ栽培が導入された当時は1戸当たり10aのタバコを作れば食べていけたが、今は10aあたり60万にも満たないそうだ。全国的な‘禁煙’の流れの中、消費者の‘たばこ離れ’は確実に生産に影響している。喫煙者の数は徐々に減少しており、JTの葉タバコ買い取り数量、耕作面積、耕作（契約）人員も年々少なくなっている<sup>6</sup>。

こうした現状から小規模経営者を対象に生産調整が行われ、耕作者の高齢化や後継者不足、管理体制が厳しくなったことや収入に繋がらなくなったことなどもあり、Eさんの周りでも葉タバコ栽培から撤退する人が多かったそうだ。

#### 農業法人について<sup>7</sup>

農業法人には農事組合法人と会社法人があり、農事組合法人は共同利用施設等の設置を行う法人（1号法人）と農業経営を営む法人（2号法人）に分けられる。また農業法人は農地の権利取得の有無によって、農業生産法人と一般農業法人に大別される。2号法人は農業経営を行うために農地を取得できる農業生産法人であり、Eさんの法人は2号法人に分類される。

農業経営が法人化すると、税制面での優遇や資金の借入れが容易になるなどの利点がある。また、経営管理能力の向上、従業員の雇用等の円滑化、雇用保険が適用されるなど農業従事者の福利厚生充実、農村の活性化などが期待される。さらに、初期負担なく経営能力や農業技術の習得が可能であり、新規就農者の受け皿の役割を担うものと考えられている。

Eさんは30年程前から機械の共同購入のための機械利用組合を作っていた。「お互い機械に年間掛けているお金を持ち寄れば、良い機械が買える。」と考えてのことだった。県が法人化を推進している時期だったこともあり、平成3年にその時のメンバーで農業法人を作った。3人の所有地と法人の所有地の耕作のほか、作業受託も行っており法人の経営面積は合わせて30haほどになる。地域の高齢化が進み、人から「作って欲しい」と頼まれて徐々に面積が増えていった。今後も耕地は増えると予想している。

#### 農業をする理由

Eさんは若い頃から農業を継ごうという意思を持っており、土地を荒れさせたくないという思いがある。「米も葉タバコも価格が安定しているし、農業はやり方次第では面白い」とやりがいを感じている。「3K（危険・汚い・きつい）の代表みたいな仕事とされている。親が子どもに農業をさせない」と後継者が不足している現状を嘆いている様子であった。

#### 4. おわりに

第3節で見てきたように小泊校下で農業を営む人々はいかに美味しい作物（品質のよい商品）を作るか、いかに売り上げを伸ばすか、いかに効率のよい経営をするか等に苦心している。この点は一般の企業と何ら変わりはない。しかし、ほとんどの人が親の跡を継いで農業をしていること、生まれ育った土地であり「荒れさせたくない」という気持ちを持っていることなどから、土

地への愛着が脈々と受け継がれているという気がした。また自分で作った作物を食べる喜びや、家族や他の誰かに自分の作った作物を「おいしい」と言ってもらい喜びなどは何ものにも代えがたい、農業でしか味わうことのできないものだと言えるのではないだろうか。私はこれを農業の持つ特殊性であると考えた。

2009年夏の総選挙での政権交代は記憶に新しい。この時の民主党の公約に「戸別所得補償制度で農山漁村を再生する」というものがある。戸別所得補償制度は、農畜産物の販売価格と生産費の差額を補填する制度で、農家に対する救済政策だと歓迎する農業関係者もいるが、これは農家が直面している問題に対する根本的解決にはならないという批判もある。

政策の是非はともかく、今農業がアツイと思う。前節の例で採り上げたように、日本には農業に魅力を感じる若い世代が少なからず存在する。

神奈川県に兄弟で養豚業を行う若手農家がいる。サービス業での経験を活かして弟が飼育、兄が営業を担当し、兄弟2人3脚でがんばっている。農家と消費者が切り離されていることが農業の最大の問題点であり、これを解決できなければ農業に未来はない、と考えた。その結果「新一次産業創造プロジェクト」と題し、生産から消費者の口に届けるまでを農家が一貫してプロデュースする仕組み作りに取り組んでいる。目標は農業を「かっこよくて、感動があって、稼げる3K産業」にすることだ。（「湘南スタイル.jp〜湘南地域情報ポータルサイト〜」より）

今回農業について書くために色々調べた中で、偶然この兄弟のことを知った。確かに「かっこよくて、感動があって、稼げる3K産業」なら、若者がこぞって農業を志向するようになるかもしれない。これからの農業が「かっこよくて、感動があって、稼げる産業」になってゆくことを願っている。

私は今回の調査で初めて知ったことが多かった。農家の娘であるのに実家の仕事を何も知らなかったことを恥じるとともに、今回のことはとてもいい経験になったと思う。今回は知識不足のために報告書には至らない点が多々あると思うが、今後もっと知識を深めていきたいと思う。

最後に、お忙しい中調査に協力して下さった雲津・小泊・伏見・高波区の皆様、第3節で具体例として取り上げさせて頂いた3人の方々、その他本章を書くに当たり参考になる多くのお話を聞かせて下さった方々に深く感謝し、本章の結びとしたい。本当にありがとうございました。

## 注

<sup>1</sup> 販売農家とは経営耕地面積が30a以上又は農産物販売金額が50万円以上の農家を指す。

第一種兼業農家とは、農業所得を主とする兼業農家のこと

第二種兼業農家とは、農業所得を従とする兼業農家のこと

<sup>2</sup> 第二種兼業農家率＝（第二種兼業農家数÷総農家数）×100：総務省 日本の統計2009 より

<sup>3</sup> 自給的農家とは経営耕地面積が30a未満かつ農産物販売金額が50万円未満の農家を指す。

<sup>4</sup> 農家一戸当たりの経営耕地面積＝経営耕地面積÷総農家数として表3-1と表3-4より筆者が算出

<sup>5</sup> 水田率＝（田面積÷耕地面積）×100：数値は総務省 日本の統計2009 より

<sup>6</sup> JT のホームページで喫煙者率、買い取り数量、耕作面積、耕作人員が公開されている。

<sup>7</sup> 農業法人の定義及び利点については（社）日本農業法人協会 <http://hojin.or.jp/>を参照した。